

舎飼黒毛和種における分娩前後の Body condition score と 繁殖成績および子牛発育との関係

片平清美

(第38回西日本畜産学会講演要旨) 1987. 10. 16. 鹿児島大学農学部

目的: 演者らはこれまでに放牧黒毛和種では分娩前のBCSが3+で、分娩後3になり、分娩後20日~60日で3+に回復する場合に繁殖成績が最も向上することを明らかにした。しかし、わが国の肉用牛は舎飼が一般的であり、上記の関係が舎飼牛でも成り立つか否かはまだ明らかでなく、肉用繁殖牛の繁殖における統一した栄養状態の指標は明確にされていない。そこで、本研究では、放牧牛で確認されたBCSの指標が舎飼牛でも適用できるか否かについて明らかにするとともに、生産された子牛の市場出荷時の発育値や価格と母牛の分娩前後のBCSとの関係を明らかにし、繁殖管理および子牛育成にとって最も合理的な母牛の分娩前後のBCSを明らかにしようとしたものである。

方法: 鹿児島県薩摩郡入来町の副田地区、浦之名地区、樋脇町および祁答院町の農家の舎飼牛88頭について、分娩前後のBCSの推移、子牛の生時体重、繁殖成績および市場出荷時の子牛の発育値ならびに価格を調査した。調査した牛は昭和60年12月から昭和61年3月の間に分娩した母牛であり、昭和61年6月まで、約15日間隔で追跡調査した。また、子牛の生時体重は農家に測定を依頼し、測定できない農家は演者らが電話連絡を受け農家で測定した。さらに子牛は市場出荷時の発育値および価格を調査した。なお、15日間隔で測定されたBCSは当該日に最も近い測定日の値を当該日の値として用いた。

結果: BCSの推移は産歴によって異なり、初産牛は高く7~10産牛は低く推移した。また、2月分娩牛はとくに分娩後20日の低下が大きかった。管理者では男女共同による場合が低く、男のみの管理では高く推移する傾向を示した。去勢子牛の体高や価格は分娩前後のBCSと、雌子牛のBCSは分娩後のBCSとそれぞれ正の相関が認められた。しかし、雌子牛の体重、日齢体重および胸囲や去勢子牛の胸囲、価格および生体単価はいずれも分娩前後の母牛のBCSとは負の2次式の関係が成り立ち、高過ぎや低過ぎるBCSは子牛の発育や価格でも不利であった。繁殖成績との関係については現在分析中である。